

富山大学人文学部同窓会会報

人文

No. 27

2005. 10. 1

富山大学人文学部同窓会

〒930-8555 富山市五福3190

電話 (076) 445-6143

FAX (076) 445-6141

題字 大島文雄先生

16世紀に編集された『絵入り年代記集成』のミニチュアチユール(挿画)より、
「モスクワ・クレムリン宮殿の建設」



歴史上有名なイワン雷帝(4世)が統治した16世紀は、ロシアという国の性格を決定的に変える転換期であった。それまで森林地帯に点在した諸都市を中心に内向きに国家を運営してきた王朝は、この時代から東方・西方へと積極的に版図の拡張をはじめた。その結果として、大量の異民族が領内に取り込まれ、ロシアは多民族(帝国)的な国へと変貌していく。その基本的性格は現在にも引き継がれている。

モスクワはそのような国家の象徴として建設された。いまでも中心にあるクレムリン宮殿や赤の広場を訪れると、西欧的なものと東洋的なものの融合を感じ取ることができる。

人文学部教授 中澤敦夫

ご挨拶 人文学部の 昨今

富山大学人文学部長 浜谷 正 人



本部研究資金担当者が「今年の（企業や団体・個人からの）奨学寄付金は、昨年同期と比較して減少気味です。各当局におかれては一層鋭意努力ねがいま

す」と私の方に鋭い視線を送りながら（そう思えた？）念を押す。机上配布された資料の人文学部欄（確かに少ない！）をちらりとみて思わず私は眼を逸らす。平成十七年七月上旬、事務局で開催されたある会議の一齣です。

人文学部同窓会の皆さん、この四月から学部長に

就任した浜谷です。人文学部に転動してきて二十二年目。思いもかけない大役です。国立大学法人富山大学という、なんとも奇妙な名前の法人になって一年余り。冒頭紹介したように、次第に実利的な組織体に変わっていく大学の情勢に戸惑いながら（儲からぬ）人文学部の舵取りを勤めています。

小さな政府の掛け声の下、近年、大学予算と教員数は減少気味で、人文学部もこの五年余りで教員四人の減員となっています。予算と教員の減少傾向は当然続くものと思われまうので、本年十月一日の富山県内三大学法人の統合を良い契機にと、人文学部の大幅な再編を考えています。三

学科と八講座を再編統合し、一学科（人文学科）七講座にまとめ、日本史学とか人文地理学とかの従来の小コース制を廃して、中コース（言語学・心理学）か

「分野」に編成替えます。各「分野」とも今後の教員減に備えて専門の開講科目や必修単位を大分減らして講座共通科目を増やしましたが、教育研究面で狙うところは従来のコースとほぼ同じと考えてよいと思います。この新しい体制で、向かい風の荒海を無事乗り切りたいということです。皆さんのご理解とご協力をお願いする次第です。

とはいえ、法人化後も学部やコースの運営は今のところほぼ順調に行われています。春秋に開催されてき

た恒例の球技大会は、「スポーツ交流大会」というスマートな名称のイベントになり、ソフトボールとバレーボールを競っていました。ますます活気付く女子学生によるバレーボールはコース対抗形式で活況を呈していますが、男子主体のソフトボールにはコース連合チームが増えてきました。授業面では、近年、野外

の実地見学をカリキュラムに取り入れるコースが増加気味で、かつては文化人類学や人文地理学コースに固有な授業形式でしたが、今や十余りのコースが日本各地に出かけています。語学関係では、従来の外国人教師（英語・ドイツ語・ロシア語・中国語）は、来年四月から外国語教育専任教員という厳めしい名の、一般教員と同じ身分になり（ただし、五年任期、再任一回）、当該語学教育は一層充実します。なお、お雇い外国人的身分であった外国人教師より給与は相当減額すること。「明治は遠くなりにけり」といえば失礼かな。就職関連の指導やイベントが充実してきたのも最近の傾向でしょう。就職委員会は盛りたくさんの講演会の類を頻繁に実施しますし、インターンシップ担当の委員会も組織され、在学時の積極的な社会体験を熱心に奨励しています。新年度からなんと構内全面禁煙です。演習・実験室はもとより教員の研究室の灰皿も撤去するほどの徹底ぶり。三十年間吸って十年前に禁煙した私には若い愛煙家が少々気の毒に感じられますが、お陰で清涼な空気が構内に満ちていて教室でも深呼吸できます。ますます小さくてもいいから北陸の一隅でキラリと光る学部にしたい、と教職員一同張り切っています。皆さんのご多幸を祈念しながら擱筆します。

変化することは楽しい！

大学も人も：

高野 恵子 (13回英)

大学を卒業して教職に就いたのが同期生四十三名中二十名。

私も中学校の英語教師を二十年勤めた。今から思えば本当にいい時代だった。教え子に言わせると、「先生は優しくなかったけど怖かった」そうである。父兄も良かった。学校のことは協力的だが、変な口出しはしなかった。昭和六十年に教職を辞したが、終わりの二、三年は生徒指導に手を焼く子が少しずつ増えてきた。いろいろな理由があったが今から思えば、子供達なりに、「助けて！」というシグナルを出していたのだろう。

教職を辞したあと、主人の経営する会社に入ることにになり、何のキャリアもない私は簿記の勉強を始めた。半年位の間に日商簿記検定の三級・二級と資格を取ったが、学生時代でもこんなに勉強したかなと思うほど集中的に勉強した。簿記は数学と同じで、答えはひとつという明快さがあり面白かった。簿記会



計で学んだ視点から会社や社会を見た時、「経済」という自分の知らなかった世界がひとつ広がった感じがした。企業の経営内容は複式簿記会計で表示されて初めて、同じものさしで計ることができると知った。

ところで、ここ二十年ばかりの間に、物や金には国境がなくなってしまった。企業は生産コストの安い所、安い所へと海外シフトを強め、お金は投資効率の高い所、高い所へと世界中を駆け巡る。そしてインターネットの普及がそれに拍車をかけている。このようにグローバル化する世界経済の中で、中小企業と言えども国際戦略なしでは生きていけない時代なのである。

タイのチェンマイに弊社が海

外生産拠点として子会社を作ってから十五年になるが、タイ語のできる社員を通訊として派遣しようとしても、タイ政府は就労ビザを出さない。通訳ならばタイ人を使いなさいという。そこで会社としてはタイ語のできる社員に数年間かけて技術を教え込み、技術者として就労ビザを取得し派遣するということになる。語学を専攻している後輩の皆さんにはショックと思うが「スペシャリストが求められている」これが実情である。



「租税教育バス」で税と生活のかかわりを小学生と共に学ぶ

機会が増えた。今年は「税や環境」の大切さを次の世代の幼い頃から学んでもらおうと、「租税教育バス」を実施した。

バス二台をチャーターし、小学四年生と父兄・先生方を招待。富山市のクリーンセンター、リサイクルセンター、浄水場などを見学した。税がどのように使われ、どのように私達の生活の基盤を支えているか実地に体感してもらったのだが、私達会員も社会貢献の一環として、共に見学し研修を深めた。

さて母校は間もなく、三大学が統合されて全く新しい「富山大学」としてスタートする。私にとつて大学時代の一番の思い出は「ワンダーフォーゲル部」である。お金がなくても安くあちこち行けるしキャンプもできるといふ単純な動機で入部した。重いリュックを背負つての山歩きは本当に辛かったが、それ以上に楽しいことが多かった。学部の異なる先輩・後輩の個性豊かな仲間と共に、自然の美しさに感嘆し、星空の下で歌い、狭いテントの中で語り合ったのが懐かしい。今でも集まると山歩きを楽しんでいる。

私の時代は、文理・教育・経

ワンダーフォーゲル部OBの仲間



済・薬学・工学の五学部だった。それぞれの進路も多種多様。卒業後も集まると話題にこと欠かない「ミニ文化交流」が始まる。複数の学部を有する「総合大学」の良さを改めて感じているが、多様さの中にこそ豊かな人間性が培われるのだろう。

今年の十一月に、OB部員の男女三十名程がヒマラヤのトレッキングに出かける。四十年経っても、イヤお金も時間も自由になるしあわせな今だからこそ、なお強く同じ釜の飯を喰った絆が学部を超えて今も続いているのであろう。

変化を受け入れる「新大学の未来」に心からのエールを贈りたい。

オープンクラスに学んで

澤 田 啓 子 (17回英)

二〇〇二年に、三十数年ぶりに富大キャンパスに立った。オープンクラスに出席するため。以来、『この子達(学生達)、マジメっ!』と感心しながら、人文学部のクラスに通っている。思えば、私はとてつもなくフマジメな学生だった。あまり学校には出ないで、ひとり家でボーッとしていたような気がする。英米文学科に籍を置きながら、英語で書かれたものを読む努力をしないで、無関係のものばかり、わかち合う友を求めることもなく、ひとり読んでいた。はた目にも自分自身の印象としても、暗い日々だった。



「したら…」と、死ははるか遠くにあると思っている者の傲慢さで、つぶやいたりしていたが、その延長線上で、『絶対』がなかったら、永遠の愛も無い』などと口走り、「すべては変化し、人の心も不変であることはできない」と、クラスメートのシニカルな笑いを誘ったこともあった。『それは分かっている、でも…』と、言葉にならない違和感に沈潜し、冬に向かう空の下、透明

に黄葉した大銀杏を見上げるしかなかった。

あれから三十数年の時を経て、人間学のクラスで、『同時性・Simultaneity』という考えを知った時、心がふるえた。たえず過ぎて行く時間とは別の「時間」、そこでは、すべてが永遠の出来事として同時にあるという。

晩秋の空に澄みわたつていく大銀杏を見上げ、そのような「時間」を、たしかに見ていたような気がする。あの時の言葉にならない孤独感が、やわらかくつけていくようだった。

オープンクラス受講生という中途半端な(試験もレポートも必要ない)立場にありながら、時として、いろいろな質問で先生を煩わせている。

『理解することは、集中して、全身で対象と向き合うことから始まる』と、クラスの一隅で私なりに学んだ心の姿勢。それを、私の塾に来てくれる中学生達に伝えていく努力をすること。で、質問屋のおばさんを許容してくださることを願っている。

ユリの木の下で

研究室から

言語学コース

教授 呉 人 恵

卒業生の皆さま、こんにちは。呉人です。当言語学コースが一九八〇年、浅井亨先生(アイヌ語学)と鈴木敏昭先生(心理言語学)を迎えて開設されて以来、早二五年の歳月が流れました。その間、両先生はすでに退職され、浅井先生の後任としていらした加藤重広先生(日本語学)も今年四月に北海道大学に転任されました。現在は開設当初とはすっかり様変わりし、ロシア語音韻論の若き精鋭学者安藤智子先生とシベリアの少数民族言語のひとつコリヤーク語を専門とする私の女性二人のスタッフとなりました。しかし、この二人体制も十月になると、大学の法人化や統合を受けた学部改組により、五人のスタッフからなる大所帯に変わります。留学生を含めた学生たちの日本語や日本語教育への関心の高さにもこたえ

たいという思いから、教育研究分野として言語学に新たに日本語教育学が加わるのです。私たちの思いに賛同して、人文学部からは湯川純幸先生(談話分析)、山崎けい子先生(日本語教育学)、教育学部からは樋野幸男先生(日本語書記史)が新たなメンバーとして加わってくださることになりました。

このように、ここ十年、言語学コースは大きな変化を経験しました。とはいえ、浅井先生と鈴木先生が吹き込んだ下だった自主独立の学びの姿勢と和気藹々とした雰囲気は今でもそのままです。コースがどのように変わっていくことも守り続けていきたい、それは大切な精神だからです。



ブラジルを訪ねて

江尻 紀子 (16回英)



同行の皆さんと (左端 筆者)

昨夏、日本の裏側ブラジルのミランドポリス市を訪ねる貴重な機会を得た。ミランドポリスはサンパウロ北西六百kmの内陸に位置し、広大な面積に人口僅か二万六千人ののんびりした高原の町。ここには富山、長野、鳥取からの移住者が多く、原生林が拓かれ今では大規模なコーヒー園、果樹園、牧場へと変貌し、二世、三世が活躍している。「勤勉で働き者」の日系人の評判は頗る良いそうだ。

た。丸一日以上飛行機を乗り継いでようやく日本の裏側に立つた実感する間もなく、素朴で熱い日系の人々の懐かしそうな出迎えに、ここはブラジルかと疑いたくなるほどだった。ホームステイの間の訪問先で今も心に深く残る光景がある。

「深めよ友情、高めよ文化」のテーマのもとにラジオ体操をし「若い力」を歌う日本語学校合同の運動会。ブラジル学校には運動会はないそうだ。日本語学校では市、県派遣の講師から熱心に日本語や日本文化を学んでいる子供や大人の姿があった。また、近郷近在から三千人もの人が集う赤提灯の下での盆踊り。日本の裏側にこのような日系社会が確かにあり、日本のよき伝統や家族の絆、地域の絆を大切に守っている人達がいる。「日本人以上に日本人らしいでしょう」二世のK氏が誇らしげに笑った。

ユバ農場の人達も忘れられない。一九三四年、弓場勇青年をリーダーにアリアンサ移住地に「新しき村」の理想を掲げて作られた共同農場。規則を作らず個人を尊重し「祈り、耕し、芸術する」の理想を七十年間も受け継いでいるのだ。数日前に訪れた大都市サンパウロとは対照的なこの田舎での質素な生活。暮しは楽ではないがキラキラと輝く瞳と「お金じゃないよ、ヤマの精神だよ」と自信に満ちた語りに感動すら覚えた。

ブラジルの長期にわたるインフレでミランドポリスの日系人農業も大きな痛手を被り、日本への出稼ぎも増えているが、彼等はいたって呑気である。

一方で、四百エーカーもある広大な敷地の中で飼料作物全てを栽培しているイタリア系の集約的経営をする牛飼育場や、パナラ川に建つ世界一の発電所など新しいブラジルの一面も垣間見た。

広大な土地と自然のエネルギーを持つブラジルは「二十一世紀の国」といわれている。他民族を受け入れるかの地での四世、五世の活躍を心より願う。

研究室 日本語文化コース

教授 二村 文人

皆さん、お変わりありませんか。平成十年に齋藤先生がフェリス学院大学へ転出された後、中井先生をお迎えして、山口・小助川・田村・中井の諸先生と二村の五名で、コースの運営に当たるようになつて、七年が過ぎました。

毎年十五人前後の新生二年生を受け入れていますから、大学院生も含めると、いつも五十名を超える大所帯で、コンパの幹事は、会場探しに苦労しているようです。授業でも、演習の受講者が多過ぎて、講義室を使うようなことがあります。

嬉しい反面、演習に見合った成果が上がっているのかどうか、心配でもあります。

最近の四年間は、山口先生が評議員更には学部長を務め、学部や全学の仕事に多忙を極めたので、近代文学関係の授業はやや手薄になっていましたが、この春からは先生

もコースに戻り、久し振りに学生の指導に力が注げると張り切っています。

私が学生だった頃は、国文と言つと、文学志望者が圧倒的に多く、語学を専攻する学生はごくわずかしかいませんでしたが、近年は方言研究を中心に、初めから日本語学を希望する人が少なくありません。反対に、私たちが当たり前に知っていた作家や作品を全く読んだことがないという学生も増えてきました。

十月には、教育学部が人間発達科学部に改組されるのに伴って、呉羽長先生をお迎えすることになっています。新大学の発足を期に、コースの新しい歴史が始まります。



これからの美術館・博物館に

求められるもの

武 沢 喜美子 (18回独)

国立美術館・博物館の独立行政法人化に続いて、二〇〇三年九月改正地方自治法第二四四条が施行され、『指定管理者制度』が発足した。これは公立美術館を含む公共施設の管理・運営に民間事業者が参入できる制度で、背景には地方自治体が財政難のため施設運営が難しくなってきたことがある。果たして民間の手法で経費節減、来館者サービスの向上などが可能になるのか。各地の自治体、美術館・博物館でこの制度導入の検討がされている。これからの美術館には利用者の多様なニーズを運営に活かすための情報収集に努め、美術館愛好者や理解者を増やすことが重要課題であろう。そして美術品を保管し、研究し、公開し、後世に伝えていく社会教育機関としての美術館本来の使命を果たすことも重要な責務である。

ところで今年八月、二一世紀の

芸術と文化のあり方を探るシンポジウム「日本の未来と、地方・芸術文化教育」が東京都内で開かれた。ご存知のように高岡短期大学が、十月に新・富山大学芸術文化学部として生まれ変わるのを記念して開催されたのである。高岡短大は地域の多様な要請に応え、地場産業の拠点化の使命を担って開学した。学科構成も初期の銅器漆器を製造する上で最も基本的な技術・知識を教える産業工芸学科と産業情報学科の各学科であった。しかし、富山大学、富山医科薬科大学との統合を契機に芸術文化学部は造形芸術、デザイン工芸、デザイン情報のほか、新たに加わる造形建築科学、文化マネジメントの五コースとなる。新しい時代の芸術、地場産業と連携した芸術文化を地方から世界へ発信する意義、教育のあり方などについて各界で活躍するパネリストが熱く議論を交わしたのは

非常に有意義であったと思う。

文化マネジメントのコースでは博物館学講座も開講され、学芸員資格の取得も可能になるであろう。私が高岡市役所に入庁し、美術館に配属された昭和四〇年代はまだ学芸員という職業が認知されず、名称自体も知らない人が多かった。ところで学芸員は、美術館や博物館で作品や資料の収集・保管・調査研究などを行うほか、展覧会を企画し、作品や資料の文化的価値を正しく評価し、伝え、見せる専門家である。一九八〇年代以降、



ブツ学芸員のご講演

多くの博物館・美術館が各地に設立され、展覧会の数も増え、博物館・美術館も以前と比べ、身近な存在となった。その結果、学芸員の社会的な役割もクロー

ズアップされ、関心も高まってきた。私はこの七月末に早期退職したが、学芸員として充実した三五年間を過ごすことができた。その間、様々な展覧会を企画し、調査研究にも携わってきた。一番思い出深いのは「東西文化の架け橋 林忠正の眼展」である。明治期に日本と西洋との文化交流に尽力した高岡出身の国際的な美術商 林忠正（一八五三―一九〇六）の業績を検証する初めての展覧会であった。林について簡単に紹介する。彼は当時まだ価値の認められていなかった浮世絵の高い芸術性を世界に紹介、大量に輸出したが、この浮世絵が印象派の発展に寄与するところとなった。また岡倉天心らの国粹主義美術運動に対抗して西洋画の擁護発展に尽くし、印象派絵画を初めて日本に紹介した業績は高く評価される。また銅器・漆器など工芸品の海外輸出にも力を注ぎ、伊藤博文、西園寺公望など政財界に知己が多かったこともあり、一九〇〇年のパリ万国博に事務局長を命ぜられ、日本の文化・産業の海外への紹介に多大な貢献をした。幅広い分野で活躍した先覚者を顕彰した本展覧

会は広島県のかつやま美術館、茨城県立近代美術館へ巡回した。この展覧会は準備に三年ほど費やし、開催まで紆余曲折があったが、ニューヨークのメトロポリタン美術館、ドイツのベルリン東洋美術館、そして国内の多くの美術館、個人所蔵家から多数の作品を借用でき、有意義な展覧会になったと自負している。会期中、ベルリン東洋美術館からは、ファイト館長、ブツ学芸員が来館され、講演会も開催した。その際、ドイツ文学専攻の後輩に通訳を引き受けて貰い、随分お世話になった。

しかし、最近美術館を取り巻く状況はかなり厳しくなり、根本的な在り方の変革が迫られている。美術館・博物館から「学芸課」の名前が消え、「事業企画課」と変更した美術館もでてきている。市町村立の博物館が幅広い利用者に活動を理解され、支援を得るには、地域の特性を考慮し、地域と密着し、地域住民に愛される美術館運営を推進しなければならぬのである。そして収益性の高い展覧会だけでなく、密度の濃い展覧会や教育普及事業の実施にも努めなければならない。



追悼

高瀬重雄先生を偲んで

吉田幸三(5回史)

冒頭から私事を申し上げるよう恐縮ですが、私は昭和二十八年三月、富山大学の入試直前に父親を亡くし、入学後、当時の文理学部文学科史学研究室にて高瀬先生にお目にかかり、そのお人柄に接して以来、勝手に父親の再現と決めこみ、真に惜越ながら長年の間「親父」と呼ばせて頂いてまいりました。

私は卒業後、学問の道を離れ家業の商店経営を引継ぐことになりましたが、先生は学問の世界に止まらず、経済界をはじめ各界の指導的立場の方々の権威ある集りのロータリークラブに入会されておいでになりました。

そして、その創始者の名前を冠したボールハリスフェローと云う名誉ある立場に列せられ、また北陸地区のガバナーとしてアメリカで開催された国際大会にご夫妻で参加されることになりました。

その際、先生の留守宅の鍵を私がお預りすることになり、責任を感じて毎日見廻りに伺ったところ、近所の人に空巣に間違えられそうになったことがございました。

不肖私も後年、先生のご推挙によりロータリークラブの末席

を汚させて頂くことになり、図らずも卒業後も長年の間、先生のご指導を仰ぐことになった次第であります。

また、先生は史学界、教育界

高瀬重雄先生 米壽祝賀会



恩師を囲む孝子達(筆者は左端)

への永年のご功績により、勲二等瑞宝章受章の栄誉にも輝いておいでになります。

その受章のため皇居へ参上される際、先生ご夫妻を富山空港までお見送りさせて頂きました。私が売店で買って差上げた週刊誌だけを手に持って、大切な受章関係の書類と皇居参上の入門証の入ったカバンを富山空港のロビーにすっかり忘れて行つて

おしまいになった次第です。

その日の夕方、先生からの「吉田君、俺のカバンを知らないか?」との電話で愕然とした私は富山空港へ素飛んでいったところ、幸いにも先生の

カバンは富山空港を管理する大沢野警察署に届けられておりまして。

そこで、空港事務所に事情を説明して翌日の一便にカバンを乗せてもらい、羽田空港の職員の方に皇居前までタクシード運んで頂いて先生に直接手渡しすると云う、全く際どい一幕がございました。

そのあと我々卒業生が全国から集り、電気ビル大ホールで盛大に祝賀会を開催致しましたが、その折、話題がお孫さんの話になったところ、先生が「俺の孫は上の子女は三月三日生れで、下の子男が五月五日生れた、君達はこの真似は出来ないだろう。」と目を細めておいでになったことを懐しく思い出します。

先生の数々の思い出の中で特に深く心に残っておりますこと

は、先生が周囲の方々の強い推薦により「学長選挙」に出馬された時のことであります。

この選挙は公職選挙法に触れないことと、当時の時代背景もあって、ある候補は市内某所で会合を開いて応援を要請したとか、別の候補は有権者宅を挨拶廻りしたとか、連日マスコミを賑わしておりました。

全く門外の私に致しましても居たたまれない心境になり、二年先輩の故京田良志氏を誘って、ある夜酒一升ぶらさげて陣中見舞に伺ったところ、先生は一人泰然として原稿を書いておいでになり、二人で「さすがが我が恩師!」と感慨を深くしたことを思い出します。

名誉教授でもあられた高瀬先生、天国には先生をお慕いして学問の道を進み、先生のお宅の隣に研究用の家まで建てられた京田氏が、他の故人卒業生ともども道をあげ、お席を用意しているはずですよ。

どうか、師弟協力して頂いて天国にも立派な史学研究室を作して下さいませう心からお願ひ致します、私の高瀬重雄先生を偲ぶ言葉にかえさせて頂きたく思う次第であります。



味深く解
まじえ興
ソードを
を、エビ
なつたか
るものに

平成16年度の総会は、11月20日いつものボルファート富山でおこなわれた。講演には、比較文学の金子幸代教授が豊富な資料をもとに森鷗外の「舞姫」を中心としたドイツ留学時代の生活を丹念に調べ、それが彼の作品にどのように活かされ魅力あるものになったかを、エピソードをまじえ興味深く解説された。

H16 総会だより



懇親会はいつもの如く和気藹藹とした雰囲気楽しい語らいのうちに終了した。

総会のご案内

謹啓 秋涼の季節になりました。皆様にはご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、本年度も下記の要領にて総会・講演並びに懇親会を開催いたします。多数ご参加いただきたくご案内申し上げます。 敬白

人文学部同窓会長 松平 義麿 記

日 時：11月12日(土) 午後2時より

場 所：ボルファートとやま

(富山市奥田新町81)

T E L 076-431-1113)

講 演

講演者：中澤 敦夫 (なかざわ あつお)

(教授・ロシア言語文化コース)

演 題：「ロシアはどこから来て、

どこへ向かうのか?」

ユーラシア大陸の北方にどしりと存在しているように見える「ロシア」という国も、その歴史を見ると、版図や民族構成を変化させ、ときには分裂・消滅の危機にもさらされてきました。それにともない「ロシア人」の民族としての自己意識も大きく変わりながら現在にいたっています。一方、この自己意識の不安定さは、ロシアの文化的な活力の源泉でもあるのです。講演では、「ロシア」の変遷の大きな流れをたどりながら、「ロシア的なもの」は何かについて考えてみたいと思います。

懇親会：午後4時より

会 費：5,000円 (当日受付にてお納め下さい)

同封のはがき (現況通知・総会・懇親会出欠等の回答) を10月28日(金)までに是非ご返送願います。

転出

人文学部教官異動

平成17・4・1

人文学部言語学コース

加藤 重広 助教授

北海道大学大学院

文学研究科助教授へ

滝脇 俊雄 (英文3)

— H16・5・7

石黒 久敬 (哲学2)

— H16・9・9

勝野 良一 (教 官)

— H16・11・11

高瀬 重雄 (教 官)

— H16・11・13

一 報 一

謹んでご冥福をお祈り致します

会員名簿発行に関するお願い

同窓会長 松平 義麿

本会では、会則第三条一項の規定に基づき、4年毎に会員名簿を発行して来ているところであります。そして、平成十八年三月はその発行の時期に当たっています。

ところで、本年四月一日からいわゆる「個人情報保護法」が施行され、名簿の作成、取り扱いなどについて一段の配意が求められることとなりました。

つきましては、会員の皆様方には、下記の三点についてご理解とご協力をいただきますよう、宜しくお願い致します。

①住所 連絡先などの会員名簿への記載について、各位

の意志を確認させていただきまます。同封の現況通知票に記入いただいた事項について、名簿記載を希望されない場合は各欄毎の「」に×印をご記入の上、期日まで回送くださるようお願い致します。

②会員名簿が本来の目的以外に使用されないよう、事務局と致しましては、今後とも会員以外には頒布しないなど厳重に対処致して参ります。各位におかれましても名簿の取り扱いに十分配慮くださるようお願い致します。

③会員名簿購入希望の方は同封の振り込み用紙で代金を納入して下さい。

化の方向が見えて来ました。会員各位のご理解とご協力に厚く御礼申し上げます。

「年会費制」導入の報告

会則を一部改正し、平成十六年四月施行後一年経過致しました。本年九月一日までに一七名の皆様から、合計九七万六千円の年会費を納入いただきました。お陰様にて、本会会計健全

編集委員

稲垣 栄子 梅本公美子
久保 尚文 仙石 敬子
山藤 登 和田 道子